ぶどう酒を水で割る
——神との関わり——

奥 田 和 子

Dilution of Wine with Water in a Theological Context

OKUDA Kazuko

Abstract : In Japan, we have been in the habit of diluting whisky or *shochu* with cold or hot water, but this is not so with wine. However, in Greece, France and Italy, as well as Israel, there have been customs about diluting wine with water.

The reasons adduced for this are : dregs or taste are too thick (1～4), to increase the quantity for reasons of economy (3, 5), to prevent the bad effects of drunkenness (6), however the reasons are not altogether clear (3, 4).

After some research into the dilution of wine with water I have noticed that the mixture of wine and water has been associated with the liturgy in an Old Testament context, the Eucharist in a New Testament context, and wine offerings to the gods in ancient Greece.

In Roman Catholic churches, water has for long been mixed with wine, and in the Eucharistic Sacrament this custom has continued to be observed until today.

はじめに

わが国ではウイスキー，焼酎などを水・湯で割って飲むことは一般に行われるが，ぶどう酒を水で割って飲む習慣はない。しかし，イスラエルをはじめギリシア，フランス，イタリアではぶどう酒を水で割って飲む習慣があったという（1～7）。この理由は，ぶどう酒の味や澱(おり)が濃厚なため（1 p. 94, 2 p. 84, 3 pp. 55～58, 4 p. 55），経済的理由で増量するため（3 pp. 55～58, 5 p. 77），飲酒により酔う弊害を軽減するため（6 p. 44）などが指摘されているが，判然としない（3 pp. 55～58, 4 pp. 54～55）。

そこで，ぶどう酒を水で割る意味を探った結果，ぶどう酒と水の混合が旧約聖書の祭儀，新約聖書のミサ（聖餐の祭儀），古代ギリシアでは神々への献酒と関わっていた。キリスト教・ローマカトリック教会ではぶどう酒に水が混ぜられて，秘跡として用いられミサの聖祭で存続し現在にいたっている。

1. ぶどう酒を水で割る習慣

1）旧約聖書—紀元前13世紀ごろ—出エジプト記，民数記など

旧約聖書（8）では，幕屋建設を指示するなかで，「机」という項目があり，次のように述べられている。すなわち，机の上に置くものとして「皿，柄杓，小瓶，水差しを作り，ぶどう酒の献げ物をささげるのに用いる。これらは純金で作る。この机に供えのパンを，絶えずわたしの前に供えなさい。」（出エジプト記25・29～30, 37・16）葡萄酒を献げるためにこれらの聖具が用いられている。

また，「ケハトの氏族とその務め」というタイトルでは，ケハトの子らを臨在の幕屋で神聖な作業に従事させるためで，その内容は，「供え物の机の上に青い布を広げ，そこに，皿，柄杓，水差し，ぶどう酒の献げ物に用いる小瓶，日ごとのパンを置き，これらに緋色の布を掛け，…」（民数記4・7）と記されている

(8)。

そこで，ヘブライ語（9），ギリシア語（10），ラテン語（11）各聖書の出エジプト記25・29～30の記載を調べた結果，用いる聖具の名称は聖書によって一様ではないが，(8,12）と同じく神に供えるための祭壇にぶどう酒と水が共に用意されている。これはおそらく，水とぶどう酒を混合したのであろう。

「エルジーブ（ギベオン）の発掘の際に葡萄酒の製造や貯蔵の種々の段階で用いられた大きな設備が発掘された。時折人は，それを澱（おり）に貯えておき，使う前に濾過した。こうして特に強い葡萄酒が得られた（イザヤ25・6)。それに水を混ぜたり（イザヤ65・11，箴言23・30，雅歌7・2)，香料を加えたりして（詩編75・8，雅歌8・2）飲んだのである。」(13 p. 653）という記述がある。

また，葡萄の酢が水で割られている。本来は水で薄められた酢い葡萄酒で，労働者（ルツ記2・14）や兵士（マタイ27・48）に与えられた。…酸味のゆえに，価値の劣ったものと見なされた（詩編69・21，箴言10・26，ルカ23・36)。(14 p. 102）という記述もある。ルカは新約聖書であるが，ついでに示した。

また，出エジプト記（29・40）には毎日朝夕二回献げ物として雄羊に小麦粉，ぶどう酒を神に献げるように記載されている（8)。「神も食べ物が必要だという素朴な信仰で神酒として神に捧げられた。民間では水で割っていた。飲酒癖は，あらゆる不節制と同じように非難された。」(14 p. 218）という記述もある。

2）キリスト教のミサでは葡萄酒を水と混ぜていた

殉教者ユスティノスの『第1護教論』（紀元150年ごろ）は，感謝の祭儀について具体的に描写した最初のものである。二重の報告になっていて，最初は洗礼式の結びにおこなわれた祭儀，二番目は主日のミサに関するものである。これは広く旅して回った著者が，全教会で一般に確立され，使われている式文を，そこで単に説明しようとしているものである。

65章3の「洗礼を授けて」では「それから兄弟たちの司会者に，パンと水の混ざったぶどう酒の杯が運ばれる。司会者はこれを受けとって，…ゆっくり感謝の祈りを唱える。」67章3の「太陽の日」では，「…祈りが終わると，パンと葡萄酒と水が運ばれる。…」(15 p. 30～31)

共同体の祈りも，シナゴークの礼拝に由来する。のちのいわゆる「十八祈願」の元をなすものは，使徒時代にさかのぼる。キリスト教の教会が各人のため，また「すべての人のために」する祈願については，ユスティノスは他の箇所でも語っている。

司会者に手わたされる供え物には，パンとぶどう酒のほかに水もあった。このことはユダヤ教の伝統に由来する習慣である。イエス時代のパレスチナでは，ぶどう酒を水で割るのがふつうだった。のちにキュプリアーヌスがこの水の混合を強調しているのは，それが最後の晩餐に由来する伝統的なやりかただ，と思っていたことを示すものである。(15 p. 32)

「古い規則では，若干の水がワインと混ぜられなければならなかった。まさにこれは，パレスチナ古来の慣習ではなく，キリストの時代にパレスチナで守られたギリシアのやり方であった。早くも2世紀には聖餐式でこの混合がはっきりと示されている。後にワインを飲むことを全く拒否したグノーシス派たちの圧力から，あちこちにワインを完全に水に置き換える傾向が現れた。ワインが，そこに水を受け入れるのとちょうど同じように，キリストは彼の中に我々とその罪を受け入れたのである。したがって，ワインに水を混ぜることは信者が信仰によってキリストと結びつこうとしているキリストとの緊密な関係結合を象徴している。そして水がもはやワインと分離できないように，この結合は決して切り離せないほど強固である。このことから，シプリアンは結論づけている。もし誰かがワインだけを捧げたら，キリストの血は我々無しの存在となり，しかし，水だけのときには，キリストなしの存在となる。水の中に人々は再び存在する。」この言葉は中世を通じて繰り返され広められた。ワインと水はキリストの神聖と人間性を示すものとされた。ちなみに，アルメニアカトリック教会はワインと一緒に水を加えることを非難してきている。またシリアのジャコバイトの間では，昔からワインに同量の水を加えるやり方であった。そしてこのやり方は，発生期のキリスト教の環境での慣習に符合している。しかしながら，西洋においても，895年のトリブール会議の例もある。

加える水の分量は，ローマ式礼拝においては，今日ワインに比べて水はほんの少しである。しかし，オリエントのそれは，形式的で，カリス（聖杯）の内容量とよい比率である。なかでもシリアのジャコバイトには発生期から古い時代からワインと水の分量は等分加えることを実行していた。西洋ではたとえば，トリブール教会会議（895年）でカリスは3分の2のワインと3分の1の水を含むように要求された。13世紀には，水よりももっと多くのワインが要求されている。

しかし，その後シンボルであるから，最小の量に減らすように決定した。同時にスプーンに見えるほどとなった。用いるワインは白でも赤でもどちらでもよい。17世紀には白ワインが一般に選ばれるようになった。それは，後で聖杯を拭くときに白布（リネン）に赤い色がつきにくいからである。（16 pp. 37～40）

「助祭と副助祭とがカリスのなかに少量のぶどう酒をいれ，水を数滴そそぎこむ。水をぶどう酒に混ぜるのは，古代人民のあいだで，もっとも一般的におこなわれていた聖式であった。すぎこしの儀式にも，これがおこなわれていた。最後の晩さんにおいて，イエスもこの式をおこなわれたのである。これは，最初からミサの式のなかに含まれていた。聖イレネウスがこの式のことを記している。」（17 pp. 110～111）

ちなみに，教会のミサでパンとワインが捧げられるのは新約聖書に次のように記されているからである。イエスは十字架につけられる前に弟子たちと最後の晩餐をし，弟子たちに次のように「主の晩餐の制定」を命じて言われた。

主イエススは，引き渡される夜，パンを取り，感謝の祈りをささげてそれを裂き，「これは，あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」といわれました。また，食事の後で，杯も同じようにして，「この杯は，私の血によって立てられる新しい契約である。飲む度に，わたしの記念としてこのように行いなさい」といわれました。だから，あなたがたは，このパンを食べこの杯を飲むごとに，主が来られるときまで，主の死を告げ知らせるのです。」（Ⅰコリント 11・23～26，マタイ 26・26～29，マルコ 14・22～25，ルカ 22・14～20）

この様式は古く旧約時代の過越際にさかのぼる。そして今日カトリック教会では，この趣旨にそってミサで聖体祭儀が行われる。聖体（パンとぶどう酒）は，キリストが現存しているということ，そして秘跡的犠牲であるという特性をもつている。

この聖体の秘跡のあと信者は聖体を拝領（いただく）ことで，キリストを食べ，飲むことになる。会食にあずかることはとりもなおさず感謝の祭儀である。信者はキリストの救いの中に組み込まれた喜びをかみしめる。

以上，ユダヤ教，キリスト教ともに葡萄酒を水で割っていることを指摘した。

新約聖書には，ぶどう酒が水で割られたという記述にはなっていないが，カナの婚姻で飲んだぶどう酒は水で割っていたという。すなわち，紀元直後のことである。「カナの婚姻の挿話によって，イエスは確実に濃厚濃赤のぶどう酒を飲んだことが教えられる。このぶどう酒を出すときは水で割らなければならなかった。かれはまたぶどう酒をのちに聖餐の啓示に結びつけたのである。」（18 pp. 211～212）

「カナの婚姻」の挿話は，新約聖書（8）によると以下のようである。3日目に，ガリラヤのカナで婚礼があって，イエスの母がそこにいた。イエスも，その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので，（イエスの）母がイエスに，「ぶどう酒がなくなりました」と言った。…そこにはユダヤ人が清めに用いる石の水がめが6つ置いてあった。いずれも2ないし3メトレテス入り（1メトレテスは約39リットルなので78ないしは117リットル）のものである。イエスが「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると，召し使いたちは，かめの縁まで水を満たした。イエスは，「さあ，それをくんで宴会の世話係のところへ持って行きなさい」と言われた。召使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか，水をくんだ召使いたちは知っていたが，世話役は知らなかったので，花婿を呼んで，言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し，酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが，あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」（ヨハネによる福音書 2・1～10）

ダニエル・ロプスはイエスの時代にぶどう酒を水で割らなければならなかったという指摘をしている。イエス時代にこのような習慣が民間にあったと言う。

3）古代ギリシア　紀元前8世紀～紀元前5世紀

ホメロスの『オデュッセイア』はトロイア戦争が終わり故国へ帰る途上の英雄オデュッセウスの叙事詩で，『イリアス』はトロイア戦争の末期の物語である。ともに紀元前8世紀ころのことである。両書物にはすでに酒を水で割るという記述が多くみられる。

すなわち，「アルゴス軍の將領たちが，長老用の燦めく酒を混酒器で割らせて盃を交わす会食の席でもそうであった。髪長きアカイア人の他の者たちが，それぞれ己の飲み分だけを乾している時，わしと同様そなたの前には盃が，気が向けばいつでも飲めるように，常に満々と酒を満たして置いてあった。」（19 p. 123）

「酒に水を割っていただけぬか。ポセイダオンならびに他の神々に神酒を献じた上，眠りに就くとしましょう。今はもうその時刻，光は既に闇の下に沈みました。」（20 p. 75）

「こう命じると，ポントノオスは甘美の酒に水を割り，一座を廻って一同の盃に献酒のための数滴をたらす。献酒を済ませて一同心ゆくまで盃を傾けた頃，アルキノオス並居る一同に向かっていうには，…」（20 p. 179）

「こういうと，アルキノオス王の隣に腰を下ろしたが，すでに給仕人たちは料理を分け，酒に水を割っているところ，折しも，近習が…」（20 p. 210）このように，酒を水で割るという動作があちこちに記されている。それも献酒した後に人々は飲み始めている。献酒の際にすでに酒は水で割られている。

また，ギリシア諸都市とペルシア帝国の争いは紀元前5世紀とされる。ヘロドトスの『歴史』はこの抗争の歴史であり食事の様子や酒を酌み交わす光景も述べられているが，ここでも同じように，酒は水で割って飲むのが正常とされており，割らずに飲むのは野卑な飲み方と考えられている。（21 p. 246）

「一同は盃をとり混酒器の酒を汲んで地上に注ぎ，永遠にいます神々に祈願する。すなわち，アカイア勢，トロイエ方を問わず，並居るものはことごとく口々に祈っていうよう…」（19 pp. 101～102）

「ギリシア神話であるウガリッド神話の特徴は神々の食事が卓越した位置を占めているという。エルは訪れてきた海の貴婦人アシェラト（エルの妻にあたる女神）をこんな具合に歓迎する。

おまえは飢えているのか？
それとも　おまえは渇いているのか？
食せよ！
そして飲め！
机の上のパンを食せよ！
酒杯の酒を飲め！
金の盃からブドウの血を！

ワインはしばしば「葡萄の血」と呼ばれる。」（22 p. 72）

「花祭りアンテステーリアとは「花が咲く」に由来する。花に囲まれて立つ神ディオニューソスを迎える祭がアンテステーリアである。…祭は3日にわたって行われる。第1日目は大甕の祭。ディオニューソス神殿で甕を開け，ワインを水で割る行事が，酒神讃歌の響く中で執り行われる。第3日目，最終日は「壺」の祭である。みんな一緒に秋の収穫（取り入れ－葡萄を踏み）をし，葡萄を発酵させ，壺の蓋をかぶせ春まで寝かせた。その壺をみんな一緒に開けて飲む。これは共同体の基本的な行動規範である。ちなみに2日目はワイン・ジョッキの祭である。ここではワインの早飲み競争が始まる。それぞれの競技参加者のワイン・ジョッキに2リットル半ほどのワインが入れられる。トランペットの開始の合図で飲み始める。」（22 pp. 104～105）

「ディオニューソスはワインの神である。アテネの北アッティカ地方はワイン醸造の中心地でそこを中心にして残酷きわまりないワインの神話が残っている。ディオニューソスはこの地に葡萄の木をもたらし，領主イーカリオスに栽培と収穫とワイン搾りを教えた。しかし，ワインができあがると牛飼いたちは飲みなれない神酒のワインに酔い潰れ…」つぎつぎと予期しない死が起こるという物語である。（22 pp. 96～97）同じく「パンディオンがアテナイ王のとき，アッティカへディオニソスが到来したが，その時イカリオスという男がこの神を迎えたので，葡萄の木と枝と醸造法を授けられました。そしてその葡萄酒を人類に恵もうとして，まず羊飼いたちに飲ませたが，彼らは水を割らずに飲み，毒を盛られたとして勘違いして，イカリオスを殺してしまったという。」（23 p. 190）

ピロコロス（アテナイの伝説的王）は次のように述べている。「アテナイ人の王アンピクチュオンがディオニュソスから酒を水で割ることを学んで，はじめて割った。」という説もある。（24 p. 139）ディオニソスはぶどう酒の神であり，これは，神のお達しと言うことになる。

アテナイオスは，神おんみずからが宣されたものだと次のように言っている。それは，「漉した酒のみ飲むという，アンテドンあるいは聖なるヒュペラに，澄まぬかぎり，葡萄酒は澱もろともにこそ飲むべけれ。」（24 p. 113）

以上，紀元前8世紀から5世紀のギリシア文明の最盛期には酒を水で割って盃を傾けている。人々はまず神々に葡萄酒を献上する。それは銘々の盃に献杯用に酒を少量入れて祈りを捧げた後，続いて杯になみなみと酒を配って貰い，楽しんで飲むという飲み方である。神々への献酒こそが，葡萄酒を飲む本意である。その出発点で，すでに葡萄酒は水で割られているのである。ディオニュソスが酒を水で割ることを教えたのは，酒で酩酊して失敗しないためである。

2．ぶどう酒に加える水の割合

「古代のいろいろな文献に引用されている作者不明の喜劇の断片に「五と三は飲め，四はだめ」というのがある。この解釈はアテナイオスによれば，五とは酒

二に水五，三とは酒一に水三とする。ところがプルタルコスによれば，『食卓歓談集』で五とは酒二に水三，三とは酒一に水二，四とは酒一に水三といい，両者は食い違っている。」(24 p. 107) しかし，いずれにしても，つねに酒を同量以上の水で割ることは確かである。

「メノイティオスの子よ，大きめの混酒器を据え，酒は強めに割り，各々方に盃を用意してくれ。この部屋にお招きしたのは，わたしには一番親しい方々だからな。」(19 p. 274) 親しい大切な人には，酒を強めに割るように支持しているのは面白い。

「水2に対してブドウ酒1の割合で，縁までいっぱいに注いでくれ。杯と杯とが押しあうように！」(25 p. 31)

「アリストテレスの記述のなかに，サモスのワインは1リットルを40名が飲んだというのがあります。サモスのワインは，おそらくこくもありアルコール充分の重いワインであったかと思われ，前記の水割りの割合中1番薄めた1対3で水割りしますと，1リットルは4リットルとなります。これを現在の700ミリリットルのドイツ・ワインの標準サイズの瓶入りに換算すると，約6本弱ですから，現在使用される1回100ミリリットル程度を入れて飲む小型のワイングラスに約45杯前後の量となりますので，40名ぐらいの口にちょうどグラス1杯ずつぐらいのワインがいゆきわたったことでしょう。」(3 pp. 55～58)

「ホメロスは，アポロンの神がくれた酒のように，たっぷりと水で割ることができる酒を讃えている。」(24 p. 91)

この記述から，水で割ったときに伸びのよいぶどう酒が好まれ，ワインの品質によって加える水の量を変えることが示唆される。

「水割の割合にはいろいろあって，ごく一般には水とワインを半々に混ぜたようです。しかし，アルコールにあまり自信のない人は，1対3, 1対2, 3対5, 2対3というような割合で，いずれも水の方を多く混ぜています。またワインの品質がよく，アルコール分が多くなるほど，水を多目に使っています。」(3 pp. 55～58)

ディオニュソスの贈物，ブドウ酒は祭日か夜友だち同志と飲むほかはめったに飲まない。しかもかならず水割りである。「さあ飲もう。どうしてランプの灯を待つのだ，…人間が苦労を忘れるようにとセメレとゼウスの御子がくださったブドウ酒だ。水2に対してブドウ酒1の割合で，縁までいっぱいに注いでくれ。杯と杯とが押しあうように！」(25 p. 31)

ぶどう酒と水の割合は，ぶどう酒の加工状態で決まるのであろう。すなわち，ぶどうの品質，生育時の天候，熟成度，貯蔵状態などである。また，開封したときのぶどうの熟成味，こく，酸味，渋味，甘み，味のバランス，アルコール度，澱の状況，ぶどう酒の味や粘りなどの物性によって決まるのであろう。「マスター」，「酒の割り手」のような専門の職人がその割合を決めていたという記述やその場の合議で決めたという記述もある。

すなわち，「スパルタに行けば，「酒の割り手」なる者が崇められていて，…」(24 p. 143)

「宴会は甘い香りの良いワインで始まる。酒宴の第2部では，宴席者は水で薄めたワインを飲み，…ワインを水で薄める比率は宴会のマスターが決める。普通ワインと水の比率は同量もしくは水3とワイン1である。」(26 p. 469)

紀元前570年頃～5世紀中頃の詩人アナクレオーンの詩の断片の中に，「10杯の水（柄酌）を5杯のワインの上に注げ…」とあり，続けて「ワインを生で飲む荒々しく野蛮なバルバロイの習慣に従うことなく，われわれは，素敵な詩歌とともに，しとやかに嗜もう」と続く。(27 p. 249) また，ギリシアではワインを水で薄めて飲んでいた。水で薄める比率は「ワインと水は1 : 1から10倍までで，場合や富に応じてシュンポシオンのホストあるいはゲストの好みによって，ワインに混ぜる水の比率は異なっていた。」(28 pp. 17～18)

3. ぶどう酒に加える水の質について

聖書では，飲料水は，河川，泉，井戸から得ており，水質の良くないことが随所に述べられている。

苦い水についての記述には次のようなものがある。モーセがイスラエルの民を，葦の海から旅立たせシュルの荒れ野に向かって3日の間進んだが，水を得なかった。マラに着いたが，そこの水は苦くて飲むことができなかった。そこで，そこの名はマラ（苦い水）と呼ばれた。民はモーセに向かって「何を飲んだらよいのか」と不平を言った。モーセが主に向かって叫ぶと，主は彼に1本の木を示された。その木を水に投げ込むと，水は甘くなった。(出エジプト記15・22～25)

また苦い水については，次のような記述がある。「第三の天使がラッパを吹いた。すると，松明のように燃えている大きな星が，天から落ちて来て，川とい

う川の3分の1とその水源の上に落ちた。この星の名は「苦よもぎ」といい，水の3分の1が苦よもぎのように苦くなって，そのために多くの人が死んだ。」（ヨハネの黙示録8・10～11）イスラエルの神，万軍の主は言われる。「見よ，わたしはこの民に苦よもぎを食べさせ，毒の水を飲ませる…」（エレミヤ書9・14）「見よ，わたしは彼らに苦よもぎを食べさせ毒の水を飲ませる」（エレミヤ23・15）

苦い水とは「毒の水」と見なされていた可能性があり，実際それを飲んで多くの人が死んだ。適さぬ水として辛い水があげられる。

「しかし，舌を制御できる人は1人もいません。舌は，疲れを知らない悪で死をもたらす毒に満ちています。わたしたちは舌で，父である主を賛美し，また，舌で，神にかたどって造られた人間を呪います。同じ口から賛美と呪いが出て来るのです。わたしの兄弟たち，このようなことがあってはなりません。泉の同じ穴から，甘い水と苦い水がわき出るでしょうか。わたしの兄弟たち，いちじくの木がオリーブの実を結び，ぶどうの木がいちじくの実を結ぶことができるでしょうか。塩水が甘い水を作ることもできません。」（ヤコブの手紙3・8～12）甘い水という表現もある。

聖書では，水は大切に扱われている。なぜなら，創世記の物語では，水から神の世界が現れた。水から生命が湧き出るだけでなく，水は生命を回復し元気づける。…過去の誤りを清め…」（29 pp. 342～343）

洗礼の場合はトレント会議では，明白に洗礼で用いる素材は，「自然の水」（aqua vera et naturalis）であると教えている（30 p. 52）

ところが，海水で割るという記述もある。「時には水以外のもの，ハチミツだとかスパイス，はなはだしいケースでは海水を入れて一杯やったりしているのだ。」（4 pp. 54～55）海水を入れるのは，おそらく塩が特別の意味を持つためではないかと考えられる。すなわち，キリスト時代の過越の祭は，出エジプト記に記されたもので，…エジプト脱出を語る詩篇114篇を朗読しながら，最初の盃を飲んだ。それから，塩からい水の数滴を祖先の人々が流した涙の思い出として飲んだ。つぎに，「にがい草」，すなわち…子羊を食べた。2つの別の盃が手から手へ渡されてつづき，3つ目の盃はおごそかに回され「祝福の盃」といわれた。その時，すべての参会者たちはハレル，すなわち…」（18 p. 96）塩水がこのように別々に飲まれるのでなく一緒に混合したのかもしれない。

水については，ヘロドトスは酒と混ざりあわない水があると次のようにいう。「ヒュバニス河の源である湖から流れ出る水の5日間は淡水で甘いが，それから4日間流れると海に至るまでの水は恐ろしく辛いのである。これは水の辛い水源からこの河に注いでいるためであるという。」（31 pp. 34～35）

加える水という意味ではなく，一般に水の質についてふれたものは以下のようである。辛い水では，「ポリュステネス，ヒュパニス両河の中間に，エクサンパイオスという名の土地がある。…この地に水の辛い水源があり，ここから流れ出す水のために，ヒュパニス河の水が飲用に適さないことを述べて言及した土地である。これは，イスタンプールとカルケドン（ウシュクダル）である。」（31 p. 51）

おいしい水という表現もある。それは，テアロス河の水源は，あらゆる河川にまさる最高最美の水を産す。（31 p. 55）

4. ぶどう酒と水を混ぜる

1）キリスト教のミサの正餐式に用いられるぶどう酒と水の混合

カトリック教会のミサの聖体祭儀では，司祭は毎回パン（ホスチア）とぶどう酒に水を少量入れたカリス（聖杯）のぶどう酒の秘跡をおこなう。信者があらかじめ奉納したものである。信者は一人ずつ順番にそれを拝領する。両手を重ねてパンを受け，そのあとそのパンをぶどう酒に浸して口に入れる。その際に用いる聖具を示した。（写真1）

2）古代ギリシアー混酒器

「混酒器（クラテール）は酒宴の席で酒と水を混ぜるのに用いる。酒はそのままでなく，水を1とか2とかその時々の割合で割って飲むのが普通であった。このための混酒器である。広く開いた口をして深く大きな腹部，高い脚，そして2つの把手をもつ。」（33 p. 24）大小，形状，材質さまざまで，多くの文献にその詳細が記述されている（図1）。（34 p. 83）

「混酒器になみなみと酒を満たす」（20 p. 17）

「広間の中で混酒器と料理を盛った食卓のまわりに，われらは倒れ伏して床一面の血の海であった。」（20 p. 296）「傍らの食卓にはパンと肉とが山に盛られ，酌人は混酒器から美酒を酌んで席を廻り，酒盃に酒を注ぐ－歓をつくすにはこれに勝るものはありますまい。」（20 p. 219）

「メルムナス家の一族はヘラクレス家から王位を奪

左からカリス（酒杯），ワイン入れ，水差し

写真1　ミサ聖祭に用いられるカリス（聖杯）とワイン入れ，水差し（兵庫県芦屋市カトリック教会で現在用いられている1例）

図1　混酒器　クラテール

出典－関　隆：パルテノンとギリシア陶器　p. 83　東信堂　1996

図2　3種類の杯とワイン酌に使われたオイノコエ

出典－村井数之亮：ギリシアの陶器　p. 26　中央公論美術出版　1972

い取ったのであるが，ギュゲスは王位に即いたのち，デルポイへおびただしい量の奉納物を献納した。実際デルポイにある銀製の奉納品のうち，きわめて多数のものがギュゲスの献納によるものであり，ギュゲスは銀製品のほかに，莫大な金製品をも奉納したが，中でも特筆すべきは，6個に上る黄金製混酒器である。これらの混酒器は，重量が30タラント（1タラントンはアッティカ単位なら約26 kg，アイギナ単位なら訳37 kg，ここでは後者の方である）もあり，「コリントス人の宝蔵」に収められている。ただ実をいえば，この宝蔵はコリントスの国有ではなく，エエティオンの子キュプセロス個人に属するものである。（21 pp. 19～20）ギリシアの有力な町はたいてい，奉納品を収める宝蔵をデルポイに建てていた。（21 p. 392）紀元前5世紀，ギリシア諸都市とペルシア帝国の争いの時である。」（21 pp. 19～20）

「リュディア王アリュウアッテスは，ミレトスに対する戦争を終えた後没した。在位57年であった。病が癒えたときデルポイに感謝の奉納をしたが，このようなことをしたのは一門では彼が二人目に当たる。彼の奉納したのは巨大な銀の混酒器と鉄を溶接して作った混酒器の台である。後者はデルポイにあるすべての奉納物中でも逸品で，キオスの人グラウコスの作に成る。」（21 pp. 25～26）黄金製および銀製の2個の巨大な混酒器を奉納したが，黄金製の方は神殿に入って右側，銀製のものは左側に据えてあった。しかし，これらの混酒器も神殿焼失の際場所を移されて，黄金製の方は現在「クラモメナイ人の宝庫」に納まっており，重量は8タラントン半と12ムナ（ムナはアイギナ単位では624 gなので12ムナは約8 kg）あり，銀製の方は神殿の前廊の隅に置かれ，6百アンポレウスの容

量がある。容量が判っているのは，テオパニアの祭のときに，デルポイ人がこれを混酒器として使用するからである。(21 p. 42) スパルタ側のいうところでは，混酒器がサルディスへ運ばれる途中，サモスの海域まできたとき，それを聞き知ったサモス人が，軍船で押し寄せてきて，混酒器を奪ったのだという。しかし，サモス人のいうところによれば，混酒器を運搬するスパルタ人の来るのが遅すぎて，かれらは途中でサルディスが陥落し，クロイソスも捕らわれたことを知ると，混酒器をサモスで売ってしまったのだという。…混酒器のことは右のとおりであったが，…」(21 p. 58)

「さて，この土地に青銅製の甕があるが，その大きさはクレオンプロトスの子パウサニアスが奉献して黒海の入り口に置かれている混酒器の6倍もある。しかし，この混酒器もまだ見たことのない人のために，説明しておくと，このスキュティアにある青銅の甕は優に600アンポレウス（1アンポレウスは39リットルなので，600×39＝23400リットル：2.34 kリットル）の容量があり，このスキュティアの甕の厚みは6ダクチュロス（1.85 cm×6＝11.1 cm）もあるのである。土地の人の話しでは，この甕は鏃（やじり）で造ったものであるという。すなわち，アリアンタスというこの国の王が，スキュティアの人口を知りたいと思い，スキュティアの全国民に命じて，各自鏃を1個ずつ持参させた。持参せぬものは死罪に処すと脅したのである。」(21 p. 51)「花模様を施した総銀製の混酒器1個」(32 p. 311)

混酒器は黄金製，銀製，真鍮製などで，彫刻が施され芸術的にも優れ価値が高く，神殿に奉納されている。

「酒を混酒器に入れて…」(32 p. 218)「燃えるが如き色の酒をまぜていた器が…」(32 p. 93)「甘美なぶどう酒を混ぜた後…」(32 p. 95)「混酒器で酒に水を割り…」(32 p. 13) などぶどう酒の種類も詳しく書かれている。

「さて，いよいよ賞品をめざして力走にかかろうとした時，走っていたアイアスが，…かくて堅忍不抜の勇将オデュッセウスがアイアスに先んじて決勝点へ入り，混酒器を手に入れた。勇名轟くアイアスは…」(35 p. 370) 今日，テニスなどのスポーツで優勝カップが手渡されるが，これは上述のように混酒器であろう。

「わたしはそなたを飢えから救ってくれるような品々ーパンに水，それに赤いぶどう酒もたっぷり筏に積んであげよう。」(20 p. 136　)

「豊富な肉を食い，甘美な酒を飲んで日の沈むまでゆっくりして過ごした。船内の赤い葡萄酒はまだ飲み尽くしておらず，残っていたからで，実はキコネス人の強固な城塞を陥した時に，各人が酒壺にたっぷりと酒を酌み入れていたのであった。」(20 p. 225) ぶどう酒は戦いの時には敵方からの戦利品であった。

「わたしはこの時，黒々とした葡萄酒を詰めた，…エウアンテスの倅マロンから貰った美酒で，…総銀造りの混酒器1個，さらにそれに添えて，生（き）のままの，世にもまれな美酒を全部で12個の酒甕に詰めてくれた。この酒のことは，彼の屋敷の下僕や女中たちで知っている者は一人もなく，知っているのは，マロン当人と，妻と女中頭だけで，この甘美な葡萄酒を飲む折りには，彼は1個の盃に酒を満たし，それを20倍の水で割る。すると混酒器からは，えもいわれぬ甘美な香りが漂い出し，とても我慢できるものではない。」(20 p. 227)「酒を壺に移してくれ…12の壺に詰めみな栓をしてくれ。」(19 p. 51) 黒いとはつねに赤ぶどう酒を意味している（16 p. 117)。また，ぶどう酒を混酒器に入れる前は酒甕に入っている。

混酒器から盃に入れてから飲む。

「杯はいずれも大きい。水を混ぜた酒だから多量にのむ。そのための大杯で，20–25 cmでも普通であり，いずれも大きな把手をもつ。杯にはほぼ3種（キュリックス，カンタロス，スキュフォス）ある。」(図2) (31 p. 26)

「3人目の女は，銀の混酒器かで芳醇の美酒を割り，黄金の盃をそれぞれの席に置く。」(20 p. 263) 銘々に注ぐ杯もいろいろある。

「心和ます葡萄酒を，山羊の革袋に盛って運んだ。伝令使イダイオスは，艶やかな混酒器と黄金の酒盃を手にして老王に近づき，うながしていうには，…」(19 p. 99)

「クセルクセスは黄金の金杯で海中に献酒（注：酒と訳したが，ペルシャ人は酒ではなくいわゆるハオマという飲料）を用いて灌祭を行った。ただし，クセルクセスは黄金の大杯で海中に献酒（ハオマも葡萄酒様のものであったという説もある。）(36 pp. 319～320) を濯ぎ太陽に祈願して，自分がヨーロッパの涯に達する以前に，自分のヨーロッパ遠征を妨げるような事故の1つも起こらぬようにと祈った。祈り終わるとその大杯と金の混酒器1個およびペルシア語でアキーナケースという短剣を海中に投じた。ただこれらの品を太陽神への奉納品として海中に沈めたのか，あるいはヘレスポントスを鞭打たせたことを悔やみ，その罪の償い

としてそれらの品を海に捧げたのか，私にも確かな判断を下すことができない。」(36 pp. 47～48)

「明知のゼウスは彼等に禍難を企み，凄まじい雷を鳴らせ続けた。一同は蒼白の恐怖に襲われて，思わず盃から酒を地上にこぼし，その力広大なクロノスの子に献酒する前には，あえて盃に口をつける者が一人としてなかった。ついで一同は身を横たえ，眠りの神の賜る恵みに与えた。」(19 p. 232)

「…早速おのおのの手に水をかけ，若者たちが混酒器に酒を満々とみたし，はじめに献酒のための数滴を盃にたらしてから，一同に酌をして廻る。献酒を済ませ，心ゆくばかり飲み終わると，…」(19 p. 273)

「風呂から上がり，オリーブ油を肌にたっぷりと塗ると食膳につき，満々と満たした混酒器から甘美な酒を汲んで，アテネに献酒した。(19 p. 329)

「ムリオスが，一同のために酒に水を割り，一人一人の前へ行って酌をする。一同は至福の神々に献酒してから甘美の酒を飲んだが，献酒を済ませて心ゆくまで盃を傾けた後，眠りに就くべく，各自が屋敷に向かって立ち去った。」(32 p. 171)

「ラエステスが一子，オデュッセウスの屋敷に入り込んで，持ち去る者もおるまいからな。そこで献酒のため酌人に酒を注がせ，神酒を献じた後に曲がれる弓を片づけようではないか。給仕の若者たちが混酒器に酒を満たして，一同の盃に献酒のための酒を注いで廻る。」(32 p. 241)

「彼を狂わせたのも酒であった。酒に分別を奪われて狂った彼は，ペイリトオスの屋敷で乱暴を働いたため，…この男は深酒で乱酔したため，第一番に己が身に災いを招いたわけだ。…」(32 pp. 242～243)

「心ゆくまで飲み食らった頃，若者たちが混酒器になみなみと酒をみたし，先ず献酒のための幾雫かを盃に注いだ後，一同に酒を振舞う。ついでアカイアの若き戦死たちは，…」(19 p. 33)

「こういうと仙女は，神々の食べ物を盛った食卓を傍らに据え，赤い霊酒に水を割った。」(20 p. 132)

「ゼウスの姫神がこのようにいうと，一同はその言葉に従った。近習たちが一同の手に水を注げば，給仕役の若者たちが，混酒器になみなみと酒を満たし，先ず神々への献酒のために数滴を一同の盃にたらす。生贄の舌を火にかけると，一同は立ち上がってその上へ神酒を注ぐ。献酒を終えて一同が心ゆくまで盃を傾けた時…」(20 p. 75)

「ゲレニア育ちの騎士ネストルは，息子らや娘婿らを随え，先に立って己の見事な屋敷へ向かったが，やがて壮麗な王の館に着くと，一同は長椅子と高椅子に並んで座り，老王は彼らのために甘美の酒に水を割る。この酒は11年目に女中頭が，甕の封をきって開けたもの，老王はその酒を水で割り，アイギスもつゼウスの姫御子，アテネ女神に献酒しつつ，心を籠めて祈願する。やがて献酒を終え，一同心ゆくばかり盃を傾けると，眠りを求めて…」(20 p. 77～78)

「若者たちが混酒器になみなみと酒を満たし，まず献酒のための幾雫かを盃に注いだ後，一同に酒を振る舞う。」このように酒をこんもりと盛り上がらせたのは，吉兆を求めてのことである。(24 p. 48)

「宴のお開きにはヘルメスに酒を献じた。これはヘルメスが眠りの守り神だと教えられていたからである。」(24 p. 57)

献酒は多くの場合，夕方のようである。多いに楽しんだ後は眠りについている。

5. 神性の背後にぶどう酒を水で割る習慣があった

1) ワインが濃厚であった

a 「そもそもぶどう酒が本来濃厚にできていたと言う説。すなわち，「ぶどう酒は一般にひじょうに濃厚で，ひじょうに黒っぽく，アルコール分とタンニン分が多かった。飲むときはそのままでなく水を割った。」(2 p. 84)

b 「この南欧産のギリシア人のワインは確かに「こく」もアルコール分も十分に含まれ，水割りに耐えて味香の楽しみを与えたということと，特質しておきたい点は，多くのギリシア人はワインの虜となっていて，あまり安くもないワインながらも，我々のいうお茶代わりに飲むまでに病みつきとなっていたので，種々の理由からついに水割り水増してでも飲む習慣ができたということでしょう。」(3 pp. 55～58)

2) ぶどう酒は高価すぎた

a 「ギリシア人はワインを愛し，叙情詩に歌いあげたが，それを読んでいても大酒飲みだと言う印象を受けない。ワインに水を混ぜるのには二つのはっきりした目的があった。市民によっては高価すぎたかもしれないワインの消費を抑えることと，いつまでも飲み続けていられると言うことである。とくにあとの方は非常に重要だった。古代ギリシア語の「シュンポシオン」という語はまさに「ともに飲む」という意味だったのである。」(5 p. 77)

b「当時としてはワインといえば，飲食料品のなかではおそらく最も手の込んだ加工食品の一つで，決して安価に大量に手に入れやすいものであったと思われません。ところが酒飲みの共通した心理は今も昔も変わりなく，誰しも盃を口に運ぶ回数が多いほど楽しいもので，たとえば今日ウイスキーなどを飲むにしても，それ自体のもつ快感とおいしさを十分承知しながらも，ストレートで二，三回で飲みほすよりも，その良さをわざわざ薄めても水割りにして数多く盃を口に運ぶ方が楽しい，とでもいう飲み方と共通するところが，その動機としては大きいようです。しかもあまり安価でもないワインともなれば，非常に貴重がって嗜んだための水割りと言う見方の方が正しいでしょう。特有の味覚を持つギリシア人にしてみれば，水割りにしてもなお十分その味香を楽しむことができたことと思います。」（3 pp. 55～58）

c　一方，聖書に登場する果物は，ぶどう，いちじく，ざくろ，なつめやし，りんごなどであり，貴重であるという表現はあまりみかけない。聖書では，ぶどうは果物としてよく登場していて，兵役では食糧の一部として持参された。（サムエル記下16・1）カナの婚姻では36リットル入りの石かめ6個を飲み干したというから，現在のワインの瓶（720 ml）換算すると300本も開けたことになる。人数がわからないので判断できないが，相当飲んだものといえよう。パレスチナでは葡萄はたわわに実った。

d「葡萄という果物がギリシア世界にとって土着の果実であったわけではない。元来，ワインは南ロシアを起点に，西アジアと地中海東海岸を経てギリシア世界に到着していると考えられる。」（22 p. 98）パレスチナとギリシアでは葡萄の取れ方がやや違う。

3）ぶどう酒は貴重

「クロイソスがペルシア進攻の準備を進めているとき，サンダニスというリュディア人が王に次のように建言した。…この男は以前からも賢人と目されていたが，ことにこの時王に示した見識ゆえに，一層賢者の誉れ高めた人物である。「王様，ただ今出兵を準備なさっておられる相手が，どんな人種であるか王様はご存じでいられますのか。彼らは革のズボンをはき，その他の衣類もすべて革製のものを用います。また，食事も土地が不毛でありますから，食べたいだけ食べるのではなく，あるものだけを食べるという輩でございますよ。さらにかれらは葡萄酒を用いず，飲料は水ばかり，食用になるいちじくすらなく，いわんや美味しいものはなに一つございません。それでもし，彼らにお勝ちになったとして，何一つもたぬ彼らから，一体何を得られると思し召す。」これはカッパドキアの住民のことでギリシアではシリア人の名で呼ばれている。」（21 p. 58）

スキュティアの様子が次のように述べられている。「年に1度各区の長官はその管轄区で，水を割った酒の甕を用意し，スキュタイ人のうち戦場で敵を打ちとった手柄のあるものだけがこの酒を飲む。そのような武功のないものはこの酒を飲むことが許されず，恥辱を忍んで離れた席に坐っている。スキュタイ人にはこれが最大の汚辱なのである。また特に多数の敵をうちとったものは，1度に2杯の盃を受け，これを一気に飲み干すのである。」（31 p. 41）手柄のある人だけがご褒美として飲んでいる。

ワインは祭の時にその多くを消費し，普段は質素に暮らしていたらしい。それは以下の内容から推測される。「バブバスティスの町に着くと，盛大に生贄を捧げて祭りを祝い，この祭で消費する葡萄酒の量は，1年の残りの期間に使う全消費量を上回るのである。この祭に集まる男女の数は子どもを除き，土地の者たちのいうところでは，総数70万に達するという。」（21 p. 200）

「ギリシア人は質素である。それは気候のせいだ，とさまざまの書物が述べている。肉はブドウ酒と同じで，金持ちの大尽をのぞき祭日にしか食べない。」（25 p. 32）葡萄酒と肉は貴重で特別の日に飲食していた。

これらの記述からギリシアでは確かにぶどう酒は貴重であったことに間違いないと思われる。

4）酒豪であることを他人に誇示

「ギリシア人が水割りを飲むようになったのは，自分が酒豪であることを他人に誇示したく大量のワインを他人（ひと）前で飲んで見せるために，できるだけワインを水で薄めて量を増して飲んだ，と言う説もあります。なるほど文武ともに秀でたギリシア民族は，確かに尚武の気質もあり，男は力を誇示し男っぽく振る舞うことを美とした点は確かです。したがってあれほど哲学的な大文化民族でありながら，絶対的な男権を揮い，婦子女は家庭の従属物として外出さえ自由でなかった社会習慣を築いています。

そこで，男は大酒して「キトン」というマントの裾をなびかせながら大道を闊歩したり，昼間は町の中央広場にたむろして声高らかに政治や哲学を論じ合うことに明け暮れていたギリシアの男性が，水割してまで

ワイン大量飲酒を他人に見せて誇ろうというのは，何かデュラントのいう「嘘つきで行動の率直なギリシア人」らしい発想のようにも思われます。この説をあえて否定するのではありませんし，そのような発想もまた水割りワインを飲む習慣の動機の一つであったかとも考えられますが，やはりもう一つ大きな動機は別であろうかと思います。」(3 pp. 55～58) 古賀氏はこの説に疑問を投げかけ納得していない。

5) 飲酒に中庸と調和を求めた

「一方，ギリシアは，ヘブライの民の土地よりおだやかな気候の場所だ。ワインに厳しい戒律がついてまわるとは考えられない。だが，かのプラトンは，男は40になるまで，つまり失われつつある“青春の喜び”を，ワインによってよみがえらせる必要が生じるまで，飲酒すべきでないとまで言っている。…これを，要するに，ギリシア人は，というか正確に言うなら最盛期のギリシア人たちは，飲酒にも中庸と調和を求めたのである。…だいたいどこの文化圏でも，国に勢いがあったり精力を伸ばしている最中だったりする時期には，飲酒はあまり盛んではない。酔っぱらっていては，よその国なんか征服できないからだ。」(4 pp. 57～58)

6) 生酒で狂気

「クレオメネスはスキュタイ人との交際から大酒癖（注：原語は「生酒を飲む癖」）で，ギリシアでは，酒は水で割って飲むのが正常とされており，割らずに飲むのは野卑な飲み方と考えられていた。しかし，生酒を飲む者というのは結局大酒家というのに等しく，それが原因で狂ったのである」といっている。(28 p. 326) というのは，かつて…スパルタ人のいうところでは，クレオメネスはその交渉のためにスパルタにきたスキュタイ人たちとの交際に溺れ，その度を越した交際の結果，彼から生酒（きざけ）を飲むことを覚えたということで，それが因で彼は気が狂ったのであると，スパルタ人は考えている。スパルタ人の話しでは，痛飲しようという時には「スキュティア式に注いでやれ」というそうである。(31 p. 246)

旧約聖書ではぶどう酒，とくに強い酒の飲み過ぎを強く戒め，禁止している。とくに幕屋（神が祭ってある聖所）に入る時は禁止している。大酒を飲む－身をもちくずす－貧乏になるという図式であろう。(37 pp. 85～93)

酒を大量にあびることは好まれなかったことも，ぶどう酒の水割りの習慣が支持された一つの理由といえよう。

7) 職務の遂行のために戒め

「13世紀料理研究家の医師たち（イタリア）はさらに多くの食に関する勧告を行った。たとえば，ワインは若者には滋養に，老人には治療になるので，両者には勧められるが，気持ちを和らげるというワインの性質は，困難な職務をなし遂げることとは相入れないので，成人はむしろ水で割って飲むべきである。女性に関しては，水にワインを1滴たらすのは大目に見られる。」(6 p. 44)

「城の上からゼウスに手を差し伸べて祈る気になったに違いない。待っておいで，すぐに，…甘美の酒を持ってきてあげよう，まず父神ゼウスと他の神々に献酒し，その上でよかったらお前も飲んで元気をつけるがよい。疲れた時には酒が一番力を盛り上がらせてくれる，お前は味方を守って疲れているに相違ないのだから。」…「いや母上，旨い酒など持ってきて下さいますな，力が抜けて戦う気力を失うようなことになっては困ります。手を洗わずにゼウスにきらめく酒を捧げるのは憚られます。」(19 p. 195)

ぶどう酒を飲んでいては，仕事がはかどらないし，まして戦争にも勝てないということであろう。

以上1～7まで諸説は，おおいに妥当性があるものと考えられる。しかし，加工技術が高度化してもこの風習が残っているのは，「神と関わる」という意味が強い。わたしたちが今日洋風の宴会の際，最初にシャンパングラスを高く捧げて祈り・祈願をする。これこそが献酒そのものの名残であろう。

おわりに

ぶどう酒を水で割って飲むという習慣は，イスラエル，ギリシア，フランス，イタリアにかなり古くからあった。なぜこうした習慣が生まれたのだろうか。これまで，ぶどう酒濃厚説，経済的安上がり説，稀少価値説，酒豪を他人に誇示するためという説，飲酒抑止説，狂気になるという説などが指摘されているが，理由は判然としないといわれている。そこで，なにか宗教的な理由が関わっているのではないかと考えた。

まず，ユダヤ教とぶどう酒との関連性を探った。その結果，旧約聖書では，すでに出エジプトの時代（紀元前13世紀ごろ）幕屋において祭壇の机の上にぶどう酒を水で割るための水と水差しが置かれる。つい

で，キリスト教では2世紀に教会のミサ聖祭の祭儀においてぶどう酒に水を混ぜる。この聖餐は，ぶどう酒をキリストの血に返還する秘跡である。ぶどう酒はキリストの神性，それにキリストが人間であったことからくる人間性つまり信者とを混ぜる。両者を混ぜることによって，神と人間との間に切り離すことのできない強い絆を確立する。ぶどう酒が水を受け入れることは，キリストが我々と我々の罪を受け入れたことを示す。当初（895年）は3分の2のぶどう酒と3分の1の水であったが，象徴として必要最小限に減少し，今日のミサでは小さなスプーンが用いられその1杯分である。『第1護教論』（紀元150）には，水の混ざったぶどう酒が運ばれている。

古代ギリシア（紀元前7～8世紀）では，神々の祭，宴会，食事の後，いずれもまず混酒器（クラテール）でぶどう酒と水をさまざまな割合で割り，その少量・数滴を各自の杯に分けて入れ神に祈ったあと，ひきつづき杯を満たして皆で飲む。神に献じるぶどう酒がそのときすでに水で割ってある。

この水で割る行為は，キリスト教ではミサ聖祭における秘蹟として，ギリシアでは神への献酒として，神と共にあることを喜び，証しする神との共食である。このやり方は当時の人々の飲み方として日常的に定着していたが，次第に民間レベルではすたれた。しかし，ぶどう酒を水で割るというその底流にある神聖は今日も持続し伝承されている。

文　献

1）三浦宗門，曾野綾子，河谷達彦：聖書の土地の人びと　p. 94　新潮社　2001

2）ダニエル・ロプス著，波木居斉二，波木居純一訳：イエス時代の日常生活Ⅱ　山本書店　1997

3）古賀　守：ワインの世界　中央公論新書　1975

4）大岡　玲：ワインという物語　文春新書　2000

5）Hugh Johnson 著，小林章夫訳：*The Story of Wine* ワイン物語　上　日本放送協会　1990

6）アントニー・ローリー著，池上俊一監修，富樫瓔子訳：美食の歴史　創元社　1996

7）S. Glixelli : *Romania* No. XLVII Les Contenances De La Table–1530 p. 36 1921

8）共同訳聖書実行委員会：聖書　旧約聖書続編つき　新共同訳　日本聖書協会　1987

9）The Bible Society in Israel : *Hebrew–English Bible* Thomas Nelson Inc. 1997

10）Aloisius Gramapica : *Biblirum Sacrorum* Andeas C. Card. Ferrari Archiepisc. Mediolanensis 1913

11）The Septuagint with Apocrypha : *Greek and English* Samuer Bagster & Sons. ltd., London 1990

12）American Bible Society, Japan *Bible* Society : Bible－和英対照　新共同訳　日本聖書協会　2000

13）旧約新約　聖書大辞典編纂委員会：旧約新約　聖書大辞典　p. 1027　教文館　1989

14）高柳俊一監修，榊原晃三監訳：聖書文化辞典　本の友社　1996

15）J. A. ユングマン著，福地幹男訳：ミサ　オリエンス宗教研究所　1997

16）Joseph A. Jungmann : *The Mass of the Roman Rite–Its Origin and Development* Benziger Brathers 1955

17）A・デル・コール著，西田　考訳：ミサの歴史　pp. 110～111　ドン・ボスコ社　1956

18）ダニエル・ロプス著，波木居斉二，波木居純一訳：イエス時代の日常生活Ⅲ　山本書店　1993

19）ホメロス著　松平千秋訳：イリアス（上）岩波書店　1992

20）ホメロス著　松平千秋訳：オデュッセイア（上）岩波文庫　1994

21）ヘロドトス著　松平千秋訳：歴史（上）岩波文庫　第38刷　岩波書店　2000

22）白井隆一郎：パンとワインを巡り神話が巡る　中央公論新書　1995

23）藤縄謙三：ギリシア神話の世界観　新潮選書　p. 190　新潮社　1990

24）アテナイオス著　柳沼重剛訳：アテナイオス　食卓の賢人たち1　京都大学出版会　1997

25）アンドレ・ボナール著　代表岡道男訳：ギリシャ文明史Ⅰ　人文書院　1973

26）Ekdotike Athenon S. A. : *The Archaic Period History of the Hellenic World* Ekdotike Athenon S. A. Athens 1975

27）Klaus Vierneisel und Bert Kaeser : *Kultur des Trinkens* Antikensammlungen Munchen 1990）

28）Joseph Veach Noble : *The Techniques of Painted Attic Pottery* Faber & Faber London 1966

29）アダルヘール・アマン著　波木居斉二訳：初代キリスト教徒の日常生活

30）福田　勤編著：マウルス・ハインリッヒ講義集（Ⅲ）現代日本におけるキリスト者の基本的神学　愛の記（アナムネシス）念－七つの秘跡－中央出版社　1985

31）ヘロドトス著　松平千秋訳：歴史（中）岩波文庫　第22刷　岩波書店　2000

32）ホメロス著　松平千秋訳：オデュッセイア（下）岩波文庫　2001

33）村井数之亮：ギリシアの陶器　中央公論美術出版　1972

34）関　　隆：パルテノンとギリシア陶器　東信堂　1996

35）ホメロス著　松平千秋訳：イリアス（下）岩波書店　1992

36）ヘロドトス著　松平千秋訳：歴史（下）岩波文庫　第33刷　岩波書店　2000

37）奥田和子：なぜ食べるのか　聖書と食　日本キリスト教団出版局　2002